

# 天台大師における法身垂迹の理論

張 堂 興(興志) 昭

たとえば天台觀門において、發心修行が感應道交をその契機とするのであれば、能応の主体たる「佛」からの作用が認められなければならない。しかし智顗教學の大前提は真如縁起論的なものではなく、あくまでも「空」に基づく実相論である。<sup>(1)</sup>そこで本稿では、智顗が右の如き問題をどう受容してゐるのか、その一端を考察する。

一 まず、智顗の特徴的な教學思想として、たとえば声聞等について、これを法身菩薩の垂迹として位置付けていることを確認しておきたい。たとえば『維摩經玄疏』には、

四明三悉檀起二大小乘論一者……(略)……舍利弗造二毘曇一、五百羅漢造二毘婆沙一、用二初番悉檀一……(略)……如二迦旃延一造二毘勒論一。亦是、用二初番悉檀一……(略)……如二訶黎跋摩一、亦用二初番悉檀一造二成實論一……(略)……天親菩薩、用二一番悉檀一、造二法華論一、釋二法華經一……(略)……如是等一切論、無レ不レ依二四悉檀一而造レ義。<sup>(A)</sup>問曰。諸論、天人所有經書、依レ何而造。答曰。法身菩薩、住二諸三昧一、生二人天中一、爲二天人師一、造レ論レ作二諸經書一。  
(大正三八・五二二c～五二三a)

とあるように、大小乗の論疏はもとより天人所有の經書までもが、法身菩薩の諸三昧力<sup>レ</sup>によつて撰述造作されている、と云い、また大本『四教義』には、

問曰。兩門不レ度、不レ可二懸判一。空門明レ位、勝二阿毘曇一。何故、捨レ勝用レ劣。答曰。毘曇雖レ劣、而是佛法根本。是故佛去レ世後、流傳利レ物。  
(大正四六・七四一a～b)

と云うのである。つまり、小乗の教理体系を説くアビダルマ論疏も「仏法の根本」であり、(法身菩薩が)「利物」している文献であると智顗は見做すのであるから、それは大きな括りとして、「大乘」的に捉えられているのである。さらには、『三觀義』にも、

明二觀成化レ物者、菩薩、從二空入レ假修證一……(略)……菩薩、住二是位一、爲二降二伏天魔及其眷屬一、即入二愛假一。現二諸神通一、乃至同二事利レ物、說二諸愛論一。如二此土三墳五典、安國育民之經書一也。爲二降二伏外道及其眷屬一、入二見假一。顯二示智慧一、乃至同二事利レ物、說二諸見論一。  
(新統藏五五・六七二下)

と、世間の論疏も菩薩の入仮による成果であると云い、さらに『玄疏』は、「又清淨法行經說。摩訶迦葉應<sup>レ</sup>生<sup>二</sup>振旦<sup>一</sup>、示<sup>二</sup>名老子<sup>一</sup>、設<sup>二</sup>無爲之教<sup>一</sup>、外以治<sup>レ</sup>國、修<sup>二</sup>神仙之術<sup>一</sup>、内以治<sup>レ</sup>身。彼經又云。・(中略)・問曰。若佛菩薩老子周孔、皆是聖人。人教有<sup>二</sup>何差別<sup>一</sup>。答曰。本地不可思議。何可<sup>二</sup>分別<sup>一</sup>。但迹教殊別、高下深淺不<sup>レ</sup>可<sup>二</sup>一概<sup>一</sup>也。」(大正三八・五二三a)と、儒家や道家の具体的な名を挙げて、悉く本地からの垂迹を説くのである。

これら智顗の所説における言わば、法身垂迹の理論は、『法華文句』の序品釈や『維摩經文疏』の弟子品釈などでも詳細に論じられている。たとえば『法華經』序品に列記される、

一時、佛住<sup>二</sup>王舍城耆闍崛山中<sup>一</sup>。與<sup>二</sup>大比丘衆萬二千人<sup>一</sup>俱。皆是阿羅漢。・(略)・其名、曰<sup>二</sup>阿若憍陳如、摩訶迦葉、優樓頻螺迦葉、迦耶迦葉、那提迦葉、舍利弗、大目犍連、摩訶迦旃延、阿菴樓駄、劫賓那、憍梵波提、離婆多、畢陵伽婆蹉、薄拘羅、摩訶拘絺羅、難陀、孫陀羅難陀、富樓那彌多羅尼子、須菩提、阿難、羅睺羅<sup>一</sup>。(大正九・一c・二a)

といった対告衆を、『文句』では四種釈のうちの本迹釈を用い、本地のありようを明かし、迹におけるありようについても具体的に説く。いま分かりやすい箇所を書き下して列挙すれば、

【二萬二千】「本は是れ菩薩、迹に萬二千の聲聞と成る。」【摩訶迦葉】「本は如來と同じく畢竟空の理に坐し、同じく廣大の法身を得、・(略)・乳味を引かんと欲して事の中に抖擻し、次に酪味を引

て空の中に抖擻し、次に生蘇を引て別の中に抖擻し、次に熟蘇を引て圓の中に抖擻す。」【三迦葉】「本迹とは三徳に住す。・(略)・これを祕密の本藏と爲す。而して迹に林城水に依つて、以つて衆生を度す。」【舍利弗】「本は實相に住す。・(略)・衆生を悲愍して迹に五味の身子となる。」【大目犍連】「本は眞際首楞嚴定に住す。能く一念に於て遍ねく十方に應じ、種種に示現して佛事を施作す。慈悲を以つての故に、迹に五味の神通を爲し引て極にいらしむ。」【須菩提】「本は實相法身に住し、迹に空を見て生ずることを示す。」(大正三四・七b・一八a)

とあり、これらを一瞥して直ちに気付くことは、菩薩より劣るとされる声聞も、利他行として衆生を導くために法身(法身菩薩)から垂迹し、釈尊一代五時の教化過程で、取えて鈍根として啖呵淘汰されていることになる。つまり智顗は經典中における声聞を、法身の意図のもとに示現している<sup>レ</sup>存在として捉えている。故に『玄義』は、「衆人但、見<sup>二</sup>迹爲<sup>一</sup>聲聞、而不<sup>レ</sup>能<sup>レ</sup>知<sup>二</sup>本是菩薩<sup>一</sup>」。(大正三四・一〇五b)とも云うのであろう。また智顗は、同じく法華の会座にある雜類衆にまで悉く本迹釈を用い、同様の解釈をほどこすのである。なお、いまの『文句』に示される本地に関する記述には、「首楞嚴定(首楞嚴三昧)」などの三昧名が確認されるが、これは前出『玄疏』の波線部(A)にある「諸三昧」に通じるものがあり、また、本地を意味する要語として、「法身」「実相」「三徳秘密藏」「畢竟空」等の異名が示される。これらはたとえ

ば『玄義』位妙の円教初住位を明かす段に、

明<sup>二</sup>十住位<sup>一</sup>者、以下從<sup>二</sup>相似十信<sup>一</sup>、能入<sup>中</sup>十住眞中智<sup>上</sup>也。初發心住發時、三種心發。一緣因善心發。二了因慧心發。三正因理心發。即是前境智行妙三種開發也。住者、住<sup>二</sup>三德涅槃<sup>一</sup>也。緣因心發、即是住<sup>二</sup>不可思議解脫、首楞嚴定<sup>一</sup>。慧心發、即是住<sup>二</sup>摩訶般若畢竟之空<sup>一</sup>。正因心發、即是住<sup>二</sup>實相法身中道第一義<sup>一</sup>。

(大正三三・七三四a)

とあることから、これらの異名と初住位とが関連すること  
は明らかであり、また『四教義』には、「比<sup>下</sup>格此明<sup>二</sup>初住<sup>一</sup>、  
與<sup>中</sup>別教初地<sup>上</sup>、智斷功德神通變化用、一往是齊。」(大正  
四六・七六三c)と言及されているから、華嚴十地の思想と関  
連があり、尚且つ菩薩の神通變化を説く『首楞嚴三昧經』<sup>(4)</sup>な  
どの所説がすでに智顗の念頭に置かれていて、それが円教初  
住位の解釈に影響していることは疑いないところであろう。  
二 さて、前出『文句』の本迹釈に関して『玄義』を見て  
みると、理事に約して本迹を明かす段に、

一約<sup>二</sup>理事<sup>一</sup>明<sup>二</sup>本迹<sup>一</sup>者、從<sup>二</sup>無住本立<sup>一</sup>一切法。無住之理、即是  
本時實相眞諦也。一切法、即是、本時森羅俗諦也。由<sup>二</sup>實相眞本<sup>一</sup>、  
垂<sup>二</sup>於俗迹<sup>一</sup>。尋<sup>二</sup>於俗迹<sup>一</sup>、即顯<sup>二</sup>眞本<sup>一</sup>。本迹雖殊、不思議一也。  
故文云。觀<sup>二</sup>一切法<sup>一</sup>、空如實相。但以<sup>二</sup>因緣有、從<sup>二</sup>顛倒生<sup>一</sup>云云。

(大正三三・七六四b)

とある。ここで注目されるのは、「從<sup>二</sup>無住本立<sup>一</sup>一切法<sup>一</sup>」  
という『維摩經』觀衆生品の一文である。これは『玄義』顯

天台大師における法身垂迹の理論(張 堂)

体章の結びにおいても、

遍爲<sup>二</sup>一切法體<sup>一</sup>者、觀經云。毘盧遮那遍一切處。一切、不<sup>レ</sup>出  
二四諦<sup>一</sup>。…(略)…當<sup>レ</sup>知、苦集、世間善惡因果。道滅、出世一  
切因果。悉用<sup>二</sup>實相爲體<sup>一</sup>。淨名曰。從<sup>二</sup>無住本立<sup>一</sup>一切法<sup>一</sup>。此  
之謂乎。

(大正三三・七九四a、b)

とあるように、『普賢觀經』の「毘盧遮那遍一切處」の「一切」  
を「四諦」とした上で、苦集とは世間の善惡の因果、滅道と  
は出世間の一切の因果であるとし、それらは悉く実相を体と  
する、という論旨において上述した『維摩經』の一文を経證  
の如く引用してくるのである。また、『玄義』の「境妙」に  
おいては、

無量義、明<sup>二</sup>一中出<sup>一</sup>無量、是從<sup>二</sup>無作<sup>一</sup>開<sup>二</sup>出三種四諦<sup>一</sup>也。法華  
明<sup>二</sup>無量入<sup>一</sup>、是會<sup>二</sup>三種四諦<sup>一</sup>、歸<sup>二</sup>無作一種四諦<sup>一</sup>也。

(大正三三・七〇一c)

と、四諦に関して『無量義經』說法品の「無量義者、從<sup>二</sup>一  
法<sup>一</sup>生。其一法者、即無相也。如<sup>レ</sup>是無相、無<sup>レ</sup>相不<sup>レ</sup>相、不<sup>レ</sup>  
相無<sup>レ</sup>相、名爲<sup>二</sup>實相<sup>一</sup>。」(大正九・三八五c)を基盤とした論  
を展開している。智顗は四種四諦について、「一法」を以て  
無作四諦に配し、「無量義」を生滅、無生、無量の四諦に配  
するのである。さらに『無量義經』說法品は、

諸佛無<sup>レ</sup>有<sup>二</sup>二言<sup>一</sup>、能以<sup>二</sup>一音<sup>一</sup>普應<sup>二</sup>衆聲<sup>一</sup>、能以<sup>二</sup>一身<sup>一</sup>、示  
二三千萬億那由他無量無數恒河沙身<sup>一</sup>、一一身中、又示<sup>二</sup>若干百千

## 天台大師における法身垂迹の理論(張 堂)

二〇〇

萬億那由他阿僧祇恒河沙種種類形、一一形中、又示若干百千萬億那由他阿僧祇恒河沙形。善男子、是則諸佛不可思議甚深境界。非二乘所知、亦非十住菩薩所及。唯佛與佛、乃能究了。

(大正九・三八六c)

と説いているが、この記述は三大部の隨所に頻出する「普現色身<sup>(5)</sup>」「無記化化<sup>(6)</sup>」「首楞嚴定(三昧)<sup>(7)</sup>」等と関連することは明らかである。ただ、あくまで智顗は、

釋「普現色身」、即有「三義」。一普現內色。二普現外色。三普現內外色。一普現內色者、如法華經明「身根清淨」。一切十法界依正色、皆於三身中現、猶如淨明鏡悉現諸色像。菩薩於淨身皆見世所有也。二外現者、亦如法華經明「普門觀音示現、隨機不同」普現十法界色也。三內外現者、如大集經明「觀己身見衆生身佛身一切悉現己身、亦見己身衆生身悉現佛身中現衆生身中」。亦如是「一切皆如影現」。即是色入法海也。

(『文疏』正統藏二七・三一五下―三一六上)

とあるように、これらのありようを「十法界」の範疇で捉え、そこに主体的な実践行法のあり得ることを示してくるのである。またこの十法界とは、上述『維摩經』の「從無住本立一切法」に関連して同じく『文疏』が、

云從無住本立一切法者、即是、若世間一切法、出世間一切法、有爲一切法、無爲一切法、皆從無住本而立。所以然者、若迷無住、是則、三界六道紛然而有、是爲立世間一切法。若解此無住、即是、無始無明則返本還源發眞成聖。故有四

種出世間聖法也。故知「因無住本立一切法」也。

(正統藏二七・二八一a)

と解釈するように、主体者が無住に迷うか否かという点において論じられるものであり、またそれは『無量義經』<sup>(10)</sup>に云う「相無くして相ならず、相ならずして相無き」性相空寂の「実相」を義処とする、と理解されるものである。ちなみに十法界は『玄義』が、「十數皆依法界」。法界外更無復法。能所合稱。故言「十法界」也。(中略)此十皆即法界、攝一切法。」(大正三三・六九三c)と説くように一切法そのものでもある。

三 ここまで検討してきた智顗の理論に関して、『摩訶止観』の大綱を略説している「発大心」「修大行」「感大果」「裂大綱」「歸大処」の五略から少しく検討を加えてみたいのだが、先ず以て五略の第四、「裂大綱」に、

爲通裂大綱諸經論故説是止觀者、若人善用止觀觀心、則內慧明了、通達漸頓諸教、如下破微塵出大千經卷上。恒沙佛法、一心中曉。若欲外益衆生、逗機設教者、隨人堪任、稱彼而説。乃至成佛化物之時、或爲法王、説頓漸法、或爲菩薩、或爲聲聞天魔人鬼十法界像、對揚發起。或爲佛所問、而廣答頓漸、或扣機問佛、佛答頓漸法輪。

(大正四六・二〇b)

とあるのは、「既に自行の約束として因(發心、修行)、果(感大果)を完ふせば、其處に當然の歸結として化他の能所即ち

從果向因の作用が起されて来る、即ち、所謂百佛世界に分身作佛して八相の化儀を現じ漸頓五時の説を以て法界衆生の疑網を裂除して大師子吼する<sup>(11)</sup>という意味である。「感大果」は天台一家において円教初住位を意味し、そこから種々の示現が起ることは本稿でも確認した通りであるが、あくまでも智顗の理解は無住、無相などの「空」思想を基調としたものであり、さらにそれを主体的に捉え直すのである。このことは五略の第一「発大心」に、

今簡非者、…(中略)…略爲十。若其心、念念專貪瞋癡、攝之不還、拔之不<sub>レ</sub>出、日增月甚、起上品十惡、如五扇提羅者、此發地獄心、行火途道。…(中略)…起中品十惡、如調達誘衆者、此發畜生心、行血途道。…(中略)…起下品十惡、如摩健提者、此發鬼心、行刀途道。若其心、念念常欲勝彼、不耐下人、輕他珍己、如鴟高飛下視、而外、揚仁義禮智信。起下品善心、行阿修羅道。若其心、念念欣世間樂。…(中略)…起中品善心、行於人道。若其心、念念知三惡苦多、人間苦樂相間、天上純樂。爲天上樂、關六根不<sub>レ</sub>出、六塵不<sub>レ</sub>入。此上品善心、行於天道。若其心、念念欲大威勢、身口意纔有所作、一切弭從上、此發欲界主心、行魔羅道。若其心、念念欲得利智辯聰、高才勇哲、鑒達六合、十方願願。此發世智心、行尼健道。若其心、念念五塵六欲外樂、蓋微、三禪樂如石泉、其樂內重。此發梵心、行色無色道。若其心、念念知善惡輪環、凡夫耽湎、賢聖所呵、破惡由淨慧、淨慧由淨禪、淨禪由淨戒、尚此三法、如飢如渴。此發無漏心、行二乘道。若心、若道、其非甚多。

天台大師における法身垂迹の理論(張堂)

略言<sub>レ</sub>十耳。

(大正四六・四a-b)

と、十非心のありようを、諸經論に登場する人師(これらは当然本地から垂迹している存在という前提でもある)などの事例を基に示した上で、それを行人の己心のありようのなかに認め、そこから「是心」そして「真正発心」を示すことから分かるように、五略の構造にしても「感大果」によって一応示される清浄大果報から、「裂大網」の如き種々の示現がなされているという前提による感応道交の理論を導入し、「発大心」「修大行」へと展開して行くことを意味していると思われる。このことは先に確認した『文疏』所説の「普現内外色」の論旨とも一致する構造であろう。

**小結** 本稿では法身の垂迹に関する智顗の理論が、『無量義經』や『維摩經』の「空」を基調とする教理的背景から捉えられていて、それが十界の範疇を以て世間出世間の一切法と会通されてくることを確認した。さらにそれらは畢竟、行人の観心の問題として不可分の、言うなれば主体的に捉えられるものであったればこそ、二乗はもとより三塗五道(六道)であろうと、

今言<sub>三</sub>而生五道以現其身者、即補處大士、法身得<sub>三</sub>二十五三昧、内破<sub>三</sub>二十五有、關<sub>三</sub>諸惡趣、慈善冥熏、隨<sub>三</sub>機應<sub>三</sub>現十方、示<sub>三</sub>受<sub>三</sub>五道身、利<sub>三</sub>衆生<sub>三</sub>也。(『文疏』卅統藏二八・九一〇a)

とあるように、(本地は)法身であり補處の大士でもあること

## 天台大師における法身垂迹の理論(張 堂)

二〇二

を明かしてくるのであり、加えてそれらは衆生を利益する存在でもあると云うように、極めて包容的な智顗の立場をそこに認めることが出来るのである。

- 1 花野充道稿「本覚思想と本迹思想—本覚思想批判に込えて—」(『駒沢短期大学仏教論集』第九号所収) 参照。
- 2 拙稿「天台大師における大小乗觀の把握について」(『大正大学大学院研究論集』第29号所収)
- 3 この他にも「普現色身三昧」、「法華三昧」等が確認できる。
- 4 たとえば『首楞嚴三昧經』には、首楞嚴三昧について、「爾時佛告堅意菩薩。首楞嚴三昧。非初地二地三地四地五地六地七地八地九地菩薩之所能得。唯有住在十地菩薩。乃能得是首楞嚴三昧。(同 六三二a)」と、十地に住在する菩薩のみに得られる三昧であることが強調されることから、華嚴經の影響を受けていることはしばしば指摘される。(たとえば河村孝照稿「首楞嚴三昧經 解題」『新国訳一切經』文殊經典部2 所収 大藏出版)
- 5 この三昧は『織田仏教辞典』に、「菩薩此三昧を得れば、種種の色身を現じて衆生を化益するを得れば普現色身三昧と名く。即ち妙音觀音の諸身を現ずる如き此三昧の力用に依る。法華經には現一切色身三昧と云へり」(一五二〇頁)とある。
- 6 無記化化禪については、長倉信祐稿「『無記化化禪』について」(『山家学会紀要』第六、七合併号所収)を参照。
- 7 首楞嚴三昧に関する先行研究として、塩入法道稿「中国初期禪觀思想における首楞嚴三昧について」(『印仏研』三八—二)、池田晃隆稿「天台智顗における首楞嚴定」(『印仏研』四九—二)

が挙げられる。

- 8 『法華文句』の釈妙音菩薩品にも「示三十四凡身四聖人身、結成十法界六道耳。」(大正三四・二四四c)とある。
- 9 この智顗の解釈をめぐっては、中古天台の文献である『關鍵類聚鈔』が、普現内色を空觀、外色を假觀、内外色を中道觀に配し、「第三ノ普現内外色<sub>ト</sub>者。行者觀門ノ相也」と記述している。(『續天台宗全書』神道1 三二三頁)
- 10 大正九・三八五c
- 11 『国訳一切經』諸宗部三「摩訶止觀解題」七頁。
- 12 同右

※印仏学会における発表題目は「天台大師における従果向因の理論」であったが、智顗には「従果向因」の用例や定義が明確でない旨、早大の大久保良峻博士より御指摘を戴いた。また花野充道先生からも種々貴重な御指摘を戴いた。記して感謝申し上げるとともに、本稿では「法身垂迹」という表現を用いて論題としてみたが、如何なものであろうか。大方の御叱正を賜れば幸甚である。

〈キーワード〉 智顗、法身、五略、本迹、無住、無相

(大正大学非常勤講師)